青年期における親への愛着と学校適応感の関連
――文章完成法を用いて――

桐　林　明　咲

Bowlby（1969）は，人類に普遍的な種の保存と個の安全と発達のための生得的システムを愛着と呼んだ。この愛着関係における子どもの主観的な経験が，発達過程にあるパーソナリティ特性や対人的な能力の形成に寄与するとされ，人生を通して，その人自身の心的状態あるいは他者との関係のとり結び方などを説明し得る総合的な概念として扱われている。青年期・成人期では質問紙法により，内的作業モデルの自己観，他者観の2つのモデルの組み合わせにより愛着スタイルの4類型を捉えた。ここで学校適応感とは「学校環境の中でうまく生活しているという生徒の個人的かつ主観的な感覚」(中井･庄司，2008)であり，学校における対人関係，学業などが規定要因と考えられている(大久保・青柳，2004)。この規定要因と愛着スタイルに関連があることが示されており，安定型の愛着スタイルを形成していると不安定型の愛着スタイルに比べて学校適応感が良いことが示されてきた。つまり不安定型の愛着スタイルについてネガティブな知見が積み重なっているのに対し，ポジティブな側面が見られていないことが課題であると考えられたため，本研究では不安定型の愛着スタイル特有の適応のあり方を明らかにすることを目的とした。

大学生145名を対象に親への愛着尺度，学校適応感尺度，文章完成法への回答を求めた。その結果「愛着不安」が高いほど学校適応感が低くなり，「愛着回避」が高いほど「居心地の良さの感覚」が低くなり，先行研究と一致する結果が示された。続いて文章完成法への回答についてテキスト分析を行った。「愛着不安」と「愛着回避」の平均値を基準に，高群・低群の4群に分類し，特徴語の把握と対応分析を行った。愛着不安低群・愛着回避高群は友人に対して距離を必要とするが，彼らなりにポジティブに捉えていること，一方で自分に対しては現状に満足することが難しいことが示唆された。愛着不安高群・愛着回避低群は対人関係不安が高いために他者から離れた一人の時間を大事にする一方で，目的が明確な関係性では不安を感じにくく熱中しやすいという可能性が示された。愛着不安高群・愛着回避高群は量的結果からは最も適応感が低いとされた群であるが，自分の世界を守りたい一方で対人希求性を有していること，他者と距離があれば関係性に落ち着きを感じられることが示唆され，彼らなりの付き合い方が存在していた。つまり，不安定型の愛着スタイルの難しさは現れていたものの，それぞれの愛着スタイルに特有の適応のあり方があると考えられた。